

(様式 1)

自己評価表

愛媛県立宇和島東高等学校
学校番号(40)

グラデュエーション・ポリシー（育成を目指す資質・能力に関する方針）	カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成及び実施に関する方針）
○ 多様な価値を認め合い、協働して社会を創造するコミュニケーション能力、人権感覚など豊かな心を育成します。 ○ 新しい時代を切り拓くための広い視野や創造力など高い人間力を育成します。 ○ 地域や国際社会における課題を発見し、解決に向けて挑戦する探究心、実践力を育成します。	○ ICTを活用し、個別学習の充実や情報発信力の向上に取り組みます。 ○ 身に付いた知識を生かし課題解決に向かう教科等横断型の授業に取り組みます。 ○ 生徒の主体性を生かした学校行事を企画・運営し、自己肯定観を育みます。

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
グラデュエーション・ポリシー	グラデュエーション・ポリシーの達成	グラデュエーション・ポリシーに沿って生徒が成長していると感じる教職員の割合 7割以上	A	「グラデュエーション・ポリシーに沿って生徒が成長していると思いますか。」という問いに対して、教職員の98%が「十分に成長している」「成長している」の肯定的な評価をしている。全校体制で取り組んでいるSSH事業の課題研究、発表を通じて、目に見える形で生徒の成長が表れている。	「十分に成長している」が31%、「成長している」が67%という評価であったため、「十分に成長している」の割合がより増えるように、生徒の地域との連携や課題研究への取組の深化を図り、生徒が活躍できる舞台を増やしたい。
心身健康で豊かな心	基本的生活習慣の定着	気持ちの良い挨拶や清潔感のある身だしなみを意識した生活をさせる。身だしなみ合格率 100%を達成する。 <u>正しいヘルメットの着用や交通ルール遵守などの徹底を図り、交通事故0を達成する。</u> A：100～90% B：89～75% C：74～60% D：59～50% E：50%未満	B	身だしなみ合格率は100%を達成できていないものの合格率は確実に上がっている。今後も風紀委員に呼び掛けを継続させ合格率を上げていきたい。自転車のヘルメット着用については確実に正しく着用できている。しかし、登下校以外での着用の問題があるように感じる。今後もヘルメットの重要性を訴えかけていきたい。	来年度より青切符制度が導入され、今以上に交通安全指導の徹底が必要になる。全校集会や担任からのSHRなどで何度も声掛けをしていく必要を感じている。身だしなみ指導については、全教職員が共通認識の下で指導を行っていきたい。身だしなみ指導が必要のない学校を目指したい。
		生徒の健康と安全に留意し、学校全体で長期欠席や不登校生徒への早期対応を図る。生徒が経済面で心配することなく、安心して学べるように奨学金制度について啓発を行う。防災教育では、 <u>生徒・教職員が災害に対する危機意識を高め、自他の命を守るために主体的に行動できる能力を育成する。そのために、避難訓練や防災学習、地域との連携を通して、実践的な知識や行動力を身に付ける取り組みを行う。</u> 加えてアンケートを実施し、改善率アップを目指す。 A：80%以上 B：79～65% C：64%～50% D：49～35% E：35%未満	A	生徒の健康と安全に留意し、学年主任・担任・教育相談課・保健厚生課が継続的に連携を図りながら情報共有を行い、長期欠席や不登校生徒への早期対応に取り組んだ、関係機関とも適宜連携し、個々の状況に応じた支援を行った。奨学金制度については、学校ホームページやさくら連絡網を活用し、積極的な周知を行った。防災教育においては、避難訓練や防災学習を通して、生徒・教職員の危機意識を高め、自他の命を守るために主体的に行動する力の育成を図った。実践的な内容を取り入れることで、防災を「自分事」としてとらえる意識が高まり、行動面での改善が見られた。	長期欠席や不登校生徒への対応については、引き続き関係課等が連携し、欠席状況の早期把握と初期対応の充実を図るとともに、生徒や保護者が相談しやすい体制づくりを進める。奨学金制度については、学校ホームページ、さくら連絡網、懇談等を通して、必要な生徒に確実に情報が届くように周知方法を工夫する。防災教育では、避難訓練や防災学習の内容を見直し、地域との連携や実践的な活動を取り入れることで、生徒が主体的に判断・行動できる力の育成を図る。生徒以上に教職員の意識向上も図る。
	人権意識の高揚	差別を無くす行動力を育てる学習活動をさらに充実させるとともに、保護者・地域との連携を図る。 人権・同和教育研修会を充実させ、全教職員が共通意識をもって課題解決に向けて主体的に取り組む。また、学校内外の人権委員会活動の活性化を図るとともに、人権委員以外の参加者を増やす。 人権委員会の活動や人権だより「Hidamari」の配布、「 <u>人権の日</u> 」の放送を通して、生徒や保護者の人権意識の高揚につなげる。感想の回収率が上がるよう、 <u>連絡網による周知や掲載内容の工夫に努める。</u> [感想回収率] A：100～81% B：80～61% C：60～41% D：40～25% E：25%未満	C	差別を無くす行動力を育てる学習活動を充実させるため、今年度は人権委員による水平社博物館訪問やバスポート体験学習などを新たに実施した。識字学級学習会で学んだことを人権委員が人権・同和教育ホームルーム活動で発表するなど、委員会活動を活性化させることもできた。また、人権・同和教育ホームルーム活動実施や人権だより「Hidamari」発行前には連絡網を通して保護者に案内連絡を行うなど、保護者・地域との連携を図ることができた。「Hidamari」回収率は昨年度と同水準であるが、保護者からの意見は貴重なものであり今後とも回収率向上に努めていきたい。	今後も差別を無くす行動力を育てる学習活動をさらに充実させるとともに、保護者・地域との連携を図る。教職員研修として、校内の人権・同和教育研修会や研究授業だけでなく、校外の各種研修会に積極的に参加する機会を増やしたい。また、人権委員会の活動や人権だより「Hidamari」の配布、「人権の日」の放送を通して、生徒や保護者の人権意識の高揚につなげるとともに、「Hidamari」については人権委員による呼びかけの強化などを通して粘り強く回収率向上に取り組む。
探究心・実践力の育成	読書の勧め	「朝の読書」の呼び掛けやホームルーム活動において読書会を実施することで、読書指導の充実を図る。「 <u>宇中文庫 Day</u> 」を設け、宇中文庫による集団読書を各クラス年間2回以上実施する。教科学習や探究活動、ホームルーム活動における図書館の利用を促し、読書冊数一人10冊以上（うち本校図書館利用一人5冊以上を目指す）を達成する。 A：10冊以上 B：7.0～9.9冊 C：5.0～6.9冊 D：2.0～4.9冊 E：2.0冊未満	B	「宇中文庫」の貸出を年2回、朝の読書の時間を使った読書指導(宇中文庫 Day)や夏休みの全校一斉貸出の他、年2回の読書会も実施した。2学期末に行った図書に関するアンケートによると、読書冊数は全校平均5.1冊(昨年5.4冊)であり、「朝の読書の時間は充実しているか」の項目では、昨年同様90%が充実していると回答している。本年度は、学校図書館整備事業の一環で県立図書館の職員の方に来校いただき、廃棄図書選定方法を中心に図書館整備のための助言を頂いた。今後も利用促進のための活動を実施していきたい。	今後も「朝の読書」の時間や読書会等を有効に活用し、読書の意欲向上に努めたい。「朝の読書」の時間が有効に活用できていない生徒やクラスが散見されたため、今後は図書委員による呼び掛けの工夫、学校全体での「朝の読書」に対する意識の向上を目指していきたい。また、図書室が生徒にとって魅力的かつ安全で使いやすいものになるよう、環境整備及び廃棄図書の選定についても継続して行っていきたい。
	分かる授業の実践	<u>ICTの効果的な活用を含む授業改善を恒常的にを行い、ICEモデルを基軸とした新しい時代に必要となる資質・能力の育成と学習評価の充実を図る。自己調整学習の研究・実践により、生徒の学習における自己肯定感を保障する。授業アンケートにおいて生徒の授業満足度※ 90%以上を目指す。</u> A：100～85% B：84～70% C：69～50% D：49～40% E：40%未満 ※授業満足度は以下の方法で算出する。 (授業アンケート全体の平均点÷満点 4点) ×100＝満足度%	A	授業アンケートの「全体の平均」は3.51、満足度は88%であり、前年度同様A段階となる。教師の説明の仕方、熱意、授業形態の多様性、評価の仕方に関する評価に対する満足度はいずれも90%を超えており、本校の授業改善の風土の浸透が伺える。一方、生徒の自身に対しての学習習慣、主体性に対する評価は85%となっている。生徒の自己調整学習をより良く支援し、一人一人の自己肯定感を高める教育実践を目指したい。	今年度も高水準の結果となった。STEAM教育を基軸とした授業改善、ICTツールの活用の研究の成果であると捉える。一方、授業者（教員）と学習者（生徒）の数値を比較すると、いずれも前者が上回っている。各生徒の自己の進路実現だけでなく、各自の自律学習者、生涯学習者としての成長のための、個別最適の学びの支援を研究・実践していきたい。生徒一人一人のどのような学力・技能を身に付けたいかというニーズを汲み取り、それらをどのように身に付けるかという指導方法を各教員が研究・実践し、教科会、教科指導委員会で共有し、生徒、保護者、学校、地域のためのよりよいチームの形成に努めたい。
		校内外の研修・研究授業に年間5回以上参加し、自己研さんに励む。授業の相互観察等（ <u>初任者や基礎研修対象者を中心に</u> ）を行い、教科等横断的な授業の実践と協働的な学びの推進に努める。また、校内研究授業や授業研究会の計画及び実施を通して、授業力向上を図る。 A：5回以上 B：4回 C：3回 D：2回 E：1回以下	A	初任者の研究授業を6回、県立学校基礎研修対象者の研究授業を5回、各教科の研究授業を11回実施した。また、進学指導研究推進プログラム研究授業や教科横断型授業を実施したり、他校の公開授業に積極的に参加したりして、多くの教員が意欲的に研修に取り組んでいた。研修や研究授業への参加回数は、年間平均5回以上であった。	来年度も引き続いて教科内外での研鑽を図っていきたい。自教科以外の教科や学科を越えた横断型授業の計画・実施の実践、相互観察の機会を今後も継続的に進めていきたい。教育センター等が主催の校外研修にも、オンライン等多様な参加形態も含めて積極的に促していきたい。
	学習習慣の確立	各教科の基礎・基本を定着させるために適切な量の課題に取り組ませる。また、自己の学習について振り返る時間を設け、目標に向かう課程や達成状況をICTの有効活用により自己評価させ、必要な学習量や内容を調整していく力を身に付けさせる。結果として1日平均3時間以上の家庭学習習慣の確立を図り、継続的な学びの姿勢を育成する。 A：3.0時間以上 B：2.9～2.5時間 C：2.4～2.0時間 D：1.9～1.0時間 E：1.0時間未満	D	9月の学習時間調査では理数科・普通科の家庭学習時間の総平均は155分(昨年度173分)、商業科は89分(昨年度55分)であり、理普科の減少が目立つ。EILSやTeamsを活用した課題配信、EILS-PBTによるデジタル採点も軌道に乗り教員の負担軽減に繋がっている。長期休業中には、3年団の先生方の御厚意で教室開放の日を設け、多くの生徒が継続した学びを続けることができた。	1. 2年次の学習時間およびその内容を充実させることが求められる。知識暗記型の学習にとどまるのではなく、それを運用する楽しさを感じられるよう取り組みたい。平素の授業や長期補習等を通して、受け身ではなく自走できる生徒の育成に力を入れたい。
	理数教育の充実	地域の未来を科学的に創造する人材の育成のため、大学・企業・海外等、外部機関との連携強化により、創造性・国際性の伸長、科学的探究の更なる充実を図る。また、教科の学びと課題研究の学びをつなげる客観的評価システムの構築を図り、 <u>ICEモデルを基軸としたルーブリックの開発等</u> により探究的授業の実現を目指す。科学系コンテスト等においては課題研究の出品数170以上、40件以上の受賞、地域貢献の意識高揚を図るため地域サイエンス事業への参加数500名以上を目指す。 (科学系コンテスト受賞) A：40件以上 B：39～30件 C：29～20件 D：19～10件 E：10件以下 (地域サイエンス事業等への参加) A：500名以上 B：400～499名 C：300～399名 D：200～299名 E：199名以下	B	愛媛大学、東京大学については継続的な連携の体制が確立するとともに、より多くの生徒が指導助言を受けられるシステムを取り入れた。また、SSH連携高校に加え近隣校との探究を通じた交流の輪を広げた。昨年度立ち上げた関西研修では最先端科学技術について発展的ぶ機会として更に内容を充実させた。ICEモデルを基軸とした評価については見直しを進めつつ教科SS、教科等横断型授業等で運用中である。科学系コンテスト等への出品・発表等は226件(R6比較+53)、受賞作品数は2月現在で43件(-3)。理数科・普通科・商業科全学科からの出品となり、受賞を果たす研究も多様化した。地域サイエンス事業イベントも活発に行われており参加人数は131名(+13)となっている。コンテストやオンラインイベントへの参加数は745名(+335)となっており、学校全体で外部イベントやコンテストへの参加が活発化している。	国内外の大学や研究機関、企業・行政との連携を拡充する。全校体制で臨むSSH事業のシステムの構築、地域との継続的な連携や社会実装につながる研究を目指し、研究の深まりを生む取組とする。自己の成長を実感できるよう学びを可視化したルーブリックの開発を継続して行う。また、卒業生メンターの活用をより進めSSH校としての実績を在校生に還元するシステムを構築する。国際性育成事業については、年間を通じた計画的な取組を継続しシステムのより一層の充実を図る。科学系コンテストへの出品数200、受賞作品は40とする。研究成果の発信の場を多様化させる。SNSの活用を進めるとともに、直接生徒が国内外、地域に発信できる場を開拓する。

	産業教育の充実	地域と協働し、地域課題の解決に必要なことを実践的に学ぶことで、ビジネスに必要な豊かな人間性と資質やビジネスを進めるためのチャレンジ精神、推進力を育成する。 課題研究の充実を図り、地域探究学習を深め、コンテスト等にも積極的に参加する。 (コンテスト、発表会参加数) A：10回以上 B：8回以上 C：6回以上 D：5回以上 E：4回以下 資格取得を奨励して全商検定1級3種目以上合格者70%以上を目指す。 (全商検定3種目1級) A：70%以上 B：69～60% C：59～50% D：49～40% E：40%未満	C	地域に必要とされる学校を目指して、学習活動を行うとともに、探究活動の充実にも力を入れ、愛媛県商業教育生徒研究発表大会第2位、SDGs甲子園2025タカラレーベン賞をはじめ、発表会、コンクール等に11回参加した。また、資格取得について、日商簿記検定7名、ITパスポート1名と全商検定については6年ぶりに全種目1級取得者を出し、全体としては、3年生106名中47名の3種目以上の取得となり、44.3%であった。	引き続き、地域と協働しながら地域課題の解決について考える探究活動を通して、地域に貢献できる人材の育成を目指す。成果の発表であるとともに、広報の一部としてのコンテスト、発表会への参加、応募を考える。資格検定の取得については、授業や部活動、学校行事と並行してになるが、生徒の資格取得のサポートとして望ましい方法を科内で検討し、生徒のキャリアアップ、進路実現につながる取組となるように考えていきたい。
魅力ある学校	生徒主体の学校行事	生徒一人一人が協働的に学校行事に関わり、愛校心を育くむことや地域に貢献する意識を高める。 学校行事満足度（普通以上）100%を目指す。 A：100～95% B：94～90% C：89～80% D：79～60% E：60%未満	A	文化祭、体育祭、ポートルース大会、クラスマッチなど生徒の満足度は高くなっていると感じる。生徒会が主体的に運営できるようになった。	周年行事を迎えるため、地域、保護者、生徒、教職員の連携で思い出に残る行事にしていきたい。そのために生徒会の活動をもう少しオープンにし、いろいろな意見を吸い上げられる体制にしていきたい。
	部活動の活性化	月間・年間計画にそって「質の高い文武両道」を目指す。生徒、教職員、保護者、地域との連携を深め、より良い部活動運営を行い、心・技・体の調和が取れた生徒を育成する。 部活動単位での地域貢献活動を年1回以上実施する。 津島分校とのより良い部活動の連携を実現する。 四国大会に12部以上、全国大会には7部以上の出場を目指す。 (四国大会) A：12部以上 B：11～7部 C：6～4部 D：3～1部 E：出場なし (全国大会) A：7部以上 B：6～5部 C：4～2部 D：1部 E：出場なし	B	各部活動は計画的に運営ができている。 また、本校の魅Can部（県指定）吹奏楽部、陸上競技部は、本校の魅力発信を積極的に行ってくれている。それ以外の部においても地域貢献活動を年1回以上は実施している。活動実績は、運動部、文化部を合わせれば四国大会、全国大会出場はAである。	生徒数の減少、教員の働き方改革に伴い部活動の姿も少しずつ変わっていく。来年度は写真新聞部と文芸を統合する。これからは毎年検討していかなければならない。生徒の選択の幅の確保をしつつ対応していきたい。
	希望進路実現	望ましい職業観や勤労観を育成するとともに、生徒の能力・適性・希望を面談等を通して把握し、個に応じた就職指導を実践する。応募前職場見学や求人票デジタル管理システムを積極的に活用し、生徒自身で最新の情報を収集できるようにサポートし、ミスマッチ防止に努め、早期の採用内定率100%を達成する。また、公務員志望者に対する指導・助言を行い、一人でも多くの合格者を出せるようにする。 A：90%以上 B：89～80% C：79～70% D：69～60% E：60%未満	A	1月末に採用内定率100%を達成した。内定者14名の内、学校紹介による3名は、求人票デジタル管理システムの活用や個別面談の実施、応募前職場見学等により、各自の希望や適性に応じた就職先を決定することができた。また、8名の公務員内定者については、模試の活用や補習の実施により、幅広い分野から出題される各種公務員試験に対応できるよう指導した。2次試験対策として、面接練習も計画的に実施し、多くの合格者を出すことができた。	昨年度の反省を生かした結果、多くの公務員試験合格者を出すことができた。また、一般就職についても、受験した生徒にとって満足度の高い結果となった。今年度の成果を来年度に繋げるために、2年次から就職・公務員希望者に対して面談を実施し、各試験に対して効率的に学習できるように指導していきたい。
		入試の多様化、早期化に応じた個別指導の充実を図るとともに、一般入試へ対応するための確かな基礎学力を身に付けさせる。さらに、教員間での定期的な情報交換を行うことで、国公立大学進学者100名以上を達成する。 A：100名以上 B：99～90名 C：89～80名 D：79～70名 E：69名以下	A	自習室の環境整備を行い、早朝・昼休み・放課後ともに利用者が増加している。 総合型・推薦入試に向けて担任への情報共有は例年以上に行うことができた。前期試験合格発表時点での国公立大学合格者数は103名である。	年内入試の情報共有および出願検討が課題である。商業科の出願については秋の推薦入試でほとんどの生徒の進学先が確定できるように努めたい。WEB出願となった共通テストについては無事に終えることができ、現在も国公立2次試験（後期試験）へ向けて補習や個別指導を行っている所である。
	ボランティア活動や地域イベントへの参加	ボランティア活動や地域イベントに関心を持ち、主体的な参加を促し、広く社会に貢献し地域を愛する人材を育成する。 校内でのボランティア活動の企画や校外のボランティア募集情報の提供を積極的に行う。 ボランティア活動や地域貢献活動（イベントなど）への参加70%以上を目指す。 A：70%以上 B：69～55% C：54～40% D：39～25% E：25%未満	A	本校にはボランティア部があり積極的な取組を行っている。また、地域からの依頼も多く、それに対する生徒たちの参加状況も良い。特に、夏場の祭り関係の依頼に対しては部活動単位で協力している。	地域は高校生の力を必要としている。まだまだ、地域に貢献できる場面はあるように思う。生徒の負担も考慮に入れつつ主体的に、そして気軽に参加できるように声掛けをしていきたい。
業務改善	適切な勤務時間	EILS、EILS-PBTやTeamsなどのICT活用の推進、テレワーク制度の活用などを通じて勤務時間外在校時間の縮小を実現する。会議の精選や部活動指導の分担等を行い、業務の効率化を推進する。月に1回の「リフレッシュデー」を実のあるものにできるようワークライフバランスに対する意識を高める。	B	ICT活用が浸透し、効率的な勤務につながっている。テレワーク制度も考査期間中や長期休業中に実施する方も増え、年次休暇の取得と合わせて勤務時間外在校時間は縮小の傾向にある。「リフレッシュデー」については実質的に機能していない面があった。	引き続き、ICTの活用や教材の共有を推奨し、勤務の効率化を促していきたい。「リフレッシュデー」については、多くの教職員が定時帰宅できるような日に設定したり、管理職からの積極的な声掛けを行ったりしていく。
	職場環境の整備	健康管理医による健康相談や健康講座を定期的に実施し、教職員の疲労や心理的負担の軽減を図る。教職員レクリエーションや教科・学年等でのコミュニケーションを密にして、学校のチーム力の向上に努める。月一回整備の必要な場所を確認し改善する。	B	定期健康診断、健康相談等の実施により教職員の心身の不調が軽度なうちに対応できている。今年度は教職員レクリエーションも実施できた。	今後も定期健康診断を確実に実施し、必要に応じて健康相談を実施して教職員の心身の不調を早期に発見し対応できるようにする。教職員間のコミュニケーションをさらに密にする。

※ 評価は5段階（A：十分な成果があった B：かなりの成果があった C：一応の成果があった D：あまり成果がなかった E：成果がなかった）とする。